



キャラクターが来る精神科外来

須田史朗, 小林聡幸 著
 金原出版
 2022年9月 208頁
 本体価格 2,500円+税

本誌読者の皆様は、漫画などのサブカルチャーを通して精神医学を論考することは、お嫌いだろうか。

表紙の麦わら帽子は人気漫画『ONE PIECE』（集英社『週刊少年ジャンプ』に連載中）の主人公がイメージされており、本書は漫画・アニメ・映画の登場人物や、有名な歴史上の人物の言動から、精神医学的な診断を試みている。

ほかにも多くの精神医学の教科書があるなか、あえて漫画作品を使って学ぶ意義に、疑問をもたれる方もおられるだろう。しかし、本書は各作品の解説でもなく、漫画の作画を使って精神医学をわかりやすく学べる教本でもない。医学部の講義として十分耐えうる精神科診断学のテキストという位置付けで、書かれている。キャラクターの診断をめぐる本書のなかで繰り返される、教官（著者）と学生の間答ではDSMを診療のなかで使用する際の注意点が述べられており、学生のみならず、精神科専門医をめざす方々にも役立つと考えられる。一方で漫画が好きで手に取った方には、あまりの本格的な論考に戸惑うかもしれない。

序文には本書の作成が開始されたのは2020年4月と記載されている。当時、新型コロナウイルス感染症の流行によって、医学生は医療機関での実習ができなくなり、著者らの勤務する自治医科大学も例外ではなく、急遽、実習がすべてオンラインとなった。学生が実際の当事者に対面する機会がなくなった代わりに、各種メディアの「キャラクター」を選び、その診断についてDSM-5に基づいて考察するという「転んでもただでは起きない」精神から企画され、そのなかの力作レポートが選定され、テーマごとに分類、編集したものが本書である。

「あとがき」において、この課題の狙いの1つはオンラ

イン授業と自粛生活を強いられている学生のモチベーションを下げないこと、もう1つは精神疾患をより身近に感じてもらい、苦手意識や偏見を自覚してもらうことにあると述べられているが、コロナ禍における医学教育のあり方にも、一石を投じたとも感じられた。

本書において、診断が試みられたキャラクター・実在の人物は38名で、レポート数の多かったキャラクター3傑は、野比のび太（『ドラえもん』）、夜神月（『DEATH NOTE』）、我妻善逸（『鬼滅の刃』）とのこと。章立ては疾患ごとになされており、ADHD、ASD、パーソナリティ障害の項目には、漫画・アニメのキャラクターが多く、後半部分のPTSD、神経症とその周辺疾患、双極性障害とうつ病、統合失調症の項では、映画・小説の登場人物や、歴史上の人物の割合が多い。書評子は表紙から漫画の登場人物についての論考が中心と思っていたが、後半にはジャンヌ・ダルク、フィンセント・ファン・ゴッホなどのすでに研究されている人物について、病跡学的な記載もあり、最近のキャラクターの論考のみではなく、読み進むごとに精神医学全体へと広がりが出てくるのも本書の特徴と感じられた。本書の構成の中心であるレポートをめぐる問答において、学生が精神疾患があると診断した症例について、教官が辛口に精神疾患にあたらないと、根拠を述べつつ修正していく部分は、医学教育的な観点からも興味深い。

また学生と教官（著者）の間答だけではなく、著者によるキャラクターについての考察が長めのコラムとして挿入されている。「不死」のキャラクターについての生物学的な考察、漫画の登場人物における発達症特性の多さについての考察が試みられるなど、こちらも大変読み応えがある。もっとも好感がもてるのは、学生・教官どちらの考察も、並々ならぬ作品へのこだわりと思入れが感じられる点である。

漫画については発表の機会を頂戴する身の上の書評子より、関心領域が同じPeerとして言わせていただくと、漫画作品『DEATH NOTE』の登場人物についてのASD、パーソナリティ障害（か否か）の論考が秀逸で、今後講義に引用を検討したいと考えている。ただし、表紙では『ONE PIECE』の主人公がイメージされており、本作についてのディスカッションを楽しみにしていたが、あまり記載がなかったのが悔やまれる。

（今村弥生）